シーワールドのアニマル達

●紋別から来たトド

開館以来飼育中の２頭のトド（オス）に加え、新たにオホーツク海沿岸にある「紋別」で捕獲されたオス・メス各１頭のトドが、昭和55年７月15日に仲間入りしました。そして、北海道の地名にちなみ、オス（体重140㎏）を「ノサ」、メス（体重83㎏）は「エリー」と名付けられました。

飼育はまず、環境と係員に馴らすことから始められましたが、人間と接するのは生まれて初めてのことなので、係員を困らせ、特にノサは北の海で縦横無尽に暴れていた癖がぬけないのか、係員を見ると突進し、おりにドシーンと体当りを加えます。それでも次第に係員にも馴れ、５月には、オーストラリアアシカ、カリフォルニアアシカ、フンボルトペンギンなどが一緒に飼育されている「なかよし広場」に移されました。「なかよし広場」でボス格のオーストラリアアシカのハルディアと、体格・パワーにまさるノサとの勢力争いが注目されましたが、あの強暴なノサも、ハルディアが近付くと、あわてて穴ぐらへ逃げ込むといった、意外に気の弱い一面も見られました。今では、勢力争いもおちつき、以前のような係員に対する攻勢も見せなくなり、ノサ・エリー共、他の動物達と仲良く、元気に暮らしています。（荒井）

▲紋別から来たトドの「ノサ」 *Eumetopias jubata*

●２年半も生きたアユ

アユは年魚とも呼ばれ、普通１年しか寿命がないことが知られていますが、当館では近くの大風沢川で昭和54年５月に採集したアユを今年の４月まで２年もの間展示することができました。このアユは、川で育った期間を加えますと２年半も生きたことになります。

アユは秋に川の下流で生まれ、すぐに海に下って冬を越します。そして春には５㎝位に育って川を上りはじめ、上流へと向って行き、岩についたそう類を食べてどんどん大きくなります。またこの頃のアユはなわばりを作って自分の餌場を守るようになります。夏の終り頃になるとこんどは下りアユとなって下流に向かい、秋には卵を産み短い一生を終わります。ですから水族館では、冬の間アユを展示できないこともあります。しかし、秋分の日が過ぎ、昼間が短くなってくるにつれて産卵にそなえておなかの中の卵が急に大きくなってくる時期に、夜間照明をつけて昼間を長くしたような状態にしておきますと、アユの成熟が遅れて卵を産まなくなり寿命が延びてきます。そこで当館では、アユの展示水槽だけは夜になっても照明を消さずに昼間が長くなったようにして、アユを長生きさせ冬でも水族館でアユを見ることができるように工夫しています。（小坂）

▲寿命はわずか１年のアユ *Plecoglossus altivelis*

編集後記

鴨川シーワールドが開館して１年半後、昭和47年３月に、この「さかまた」は創刊されました。はじめは、生物の豆辞典として、当館の展示内容を中心とした生物に関する知識の啓蒙と普及を目的として、社会教育活動用に企画編集されました。しかし、その後、動物友の会設立により、社会教育活動も順次発展したため、本17号より従来の４～６ページを８ページとし、内容の充実に努め、当館の活動記録も掲載し、皆様に水族館の実態を理解していただけるように配慮いたしました。この小冊子がささやかながら正しい動物の知識と水族館の仕事を知る上でお役に立てばと思い、年２回の発行を続けていきますので、今後共一層のご指導とご支援をお願い申し上げます。（清水）

表紙説明

アイスランドからやって来た、当館のシャチ「キング」と「カレン」は、はや２年目の夏を迎えようとしています。今では日本の気候にもすっかりなれ、色々な芸を覚え係員を背に乗せてプールを一周するまでにもなりました。（藤岡）

さかまた No.17

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296　千葉県鴨川市東町1464－18

☎ 04709（2）2121

発行日　昭和56年７月

さかまた

鴨川シーワールド　NO.17

シーワールドの ペンギン家族

フンボルトペンギンは南アメリカのチリ近辺を流れるフンボルト海流という寒流に沿って生活している小型のペンギンで、体長は約50㎝、体重は約4㎏です。各地の水族館や動物園で最も多く飼育されていて、繁殖例もペンギンの仲間では多い種類です。当館でも飼育動物のなかで最初に繁殖に成功した動物です。

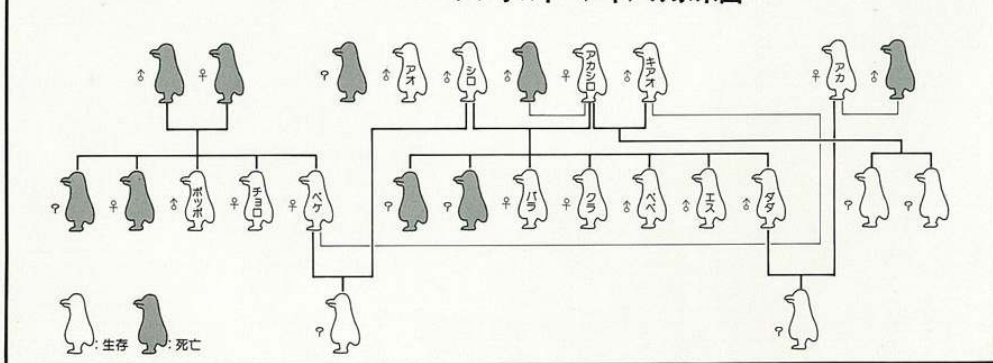
当館でのフンボルトペンギンの飼育は、昭和45年に搬入された10羽の成鳥から始められ、現在ではペンギンプールに10羽、ショーペンギン舎に3羽、なかよし広場に4羽の合計17羽を飼育しています。この内、ペンギンプールの6羽は、いずれもペアを組んでいて、今年も4羽のヒナが生まれ、元気に育っています。フンボルトペンギンのペアはどちらかが死んだりしていなくならない限り相手をかえないと思われていましたが、当館の例では他の相手とペアを組みかえた事がありました。

▲フンボルトペンギンの親子　*Spheniscus humboldti*

繁殖は、昭和47年に2羽のヒナが生まれたのに始まり、現在までに16羽が生まれ、そのうちの12羽が元気に育っていますが、それらのなかには卵を産みヒナを育てているものさえいます。繁殖期は2月から4月で3月に最も多く卵を産みます。1度に産む卵の数は1個から2個ですが、2個産むことが多いようです。親は1月末から2月初めに卵を産む準備にかかります。それぞれのペアはオスが中心になって自分達の巣穴に小枝などの巣の材料となるものを運び込み、巣作りに精を出します。3月頃になり、巣ができあがると親は卵を産み落し、その上にうつぶせになり、おなかの毛で卵を包んで暖めます。卵はオスとメスにより交互に暖められますが、メスが中心になって行なっているようです。そして、35日から43日後に卵はふ化します。

餌はイワシやシシャモなどの小魚で、1日に600g程を2回に分けて与えていますが、ヒナを育てている親は一度食べた餌を口もとまで出してヒナに食べさせますので、普段よりも多い1㎏程を与えています。ヒナの食欲は旺盛で少しでもおなかがすくとピィーピィーと鳴き、盛んに餌をねだりながら、日に日に大きくなり、ふ化後40日を過ぎる頃よりうぶ毛が抜けかわりペンギンらしくなってきます。そしてふ化後70日前後で巣立ちをして自分で餌を食べるようになります。しかし、さらに1年経過して羽が抜けかわらないと親と同じ模様にはなりません。

当館で生まれ育ったフンボルトペンギンの中には「行進」・「握手」・「おまわり」などの芸を覚えてショーに出演し、愛きょうを振りまいているものもあり、当館を訪れる多くの人々を楽しませてくれています。その他、昭和54年12月からはフンボルトペンギンより少し小粒で頭に黄色いかざりをつけた3羽のイワトビペンギンも加わり、当館のペンギン家族はこれからもますます増えてゆきそうです。

（青木・吉野）

鴨川近辺の イカの話・あ・れ・こ・れ

昭和55年6月29日、鴨川沖を元気無く漂っていた巨大なイカが捕えられ、港に運ばれてきました。「化け物のようなイカがいるので見に来てほしい」という電話に、私達はとるものもとりあえず駆けつけました。港には多勢の人が集まっていて、すでに息絶えている大きなイカを取り囲んであれやこれやと騒いでいました。そのイカは形と大きさからダイオウイカだということはすぐに分かりましたが、なにしろ私達も実物を見るのはこれが初めてです。驚きと興奮を静めながら大きさを測ることにしました。体重が39.5㎏、胴の長さが1ｍ15㎝、腕まで加えると2ｍ93㎝もありました（最も長い触腕は2本とも付け根から切れていて、もしこれが付いていたとしますと全長は3ｍを越えたでしょう）。ダイオウイカは世界最大のイカとして知られていて、今までの記録ではカナダのニューファンドランドで胴の長さが約6ｍ、腕まで加えた長さが16.5ｍという例があります。また、ダイオウイカは普通は深海に住み、人目につくことはまずありません。ただ、地震などの影響で深海の動物が水面まで浮かび上って来るという報告もあり、当時はちょうど伊豆沖の群発地震が騒がれていましたので、「どうしてこんなに大きなイカが捕れたの？」という見物人の質問に、「地震があるかも知れませんよ！」と半ば冗談のつもりで返答をし、気味悪がって誰も引き取り手が無いこのイカを標本として当館へ持ち帰って来ました。その後、間もなくして、グラッと揺れたのにはさすがの私達もびっくりしてしまいました。千葉県で震度4を記録する地震が起きたのです。地震とこのイカの発見とは、やはり関係があったのでしょうか？。

▲世界最大のイカ　ダイオウイカ　*Architeuthis japonica*

さて、ダイオウイカが世界最大のイカならば、世界最小のイカは？といいますと、胴の長さがわずか2㎝足らずのヒメイカです。ヒメイカは鴨川近辺でも磯の藻場にごく普通に見られます。と、いってもあまりにも小さく、海そうとよく似た保護色をしていることと、背中より粘着物を出して海そうなどにくっついていることが多いため、海の中で見つけるのは不可能といってもよいでしょう。当館ではタツノオトシゴやヘコアユなどの小魚の活き餌としてエビの子供のようなアミを採集していますが、その群れに混じってヒメイカが採れることがあります。しかし、このイカがあまりにも小さいため、最初は別の種類のイカの子供だろうと思って飼育していましたが、何日たっても一向に大きくなりません。そのうちに水そうの中に直径がわずか1.5㎜程の卵を産みつけましたので不思議に思いよく調べてみますと、子供ではなくれっきとしたヒメイカの親であることが分かりました。ヒメイカの飼育は比較的容易なため、展示を試みたことがありましたが、水そうの壁にくっついていることが多く、ほとんどの人はこの小さなイカには気付かないようでした。

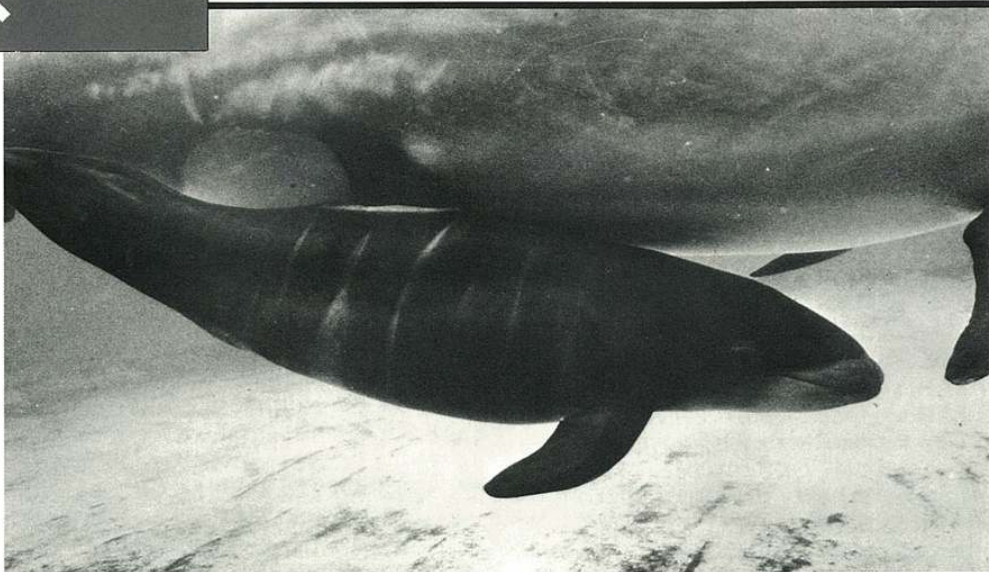
▲世界最小のイカ　ヒメイカ　*Idiosepius pygmaeus*

▲卵を産んでいるシリヤケイカの夫婦　*Sepiella japonica*

このヒメイカの展示はまだ残念ながら成功していませんが、コウイカ類については卵から生まれた子供を育て、親になるまでの段階的な展示を続け、人気を集めています。房総沿岸で普通に見られ食用となっているコウイカ類は胴の長さが20㎝程のコウイカとシリヤケイカで、コウイカは内房にシリヤケイカは外房に多く見られます。昨年の4月に鴨川沖の定置網で採集した1匹のシリヤケイカが翌月に卵を産みました（シリヤケイカの寿命はわずか1年で産卵後死亡します）。そしてその卵から生まれてきた子供達はすくすくと育ち、6匹が親となり、今年の3月には卵を産みました。現在では、この卵から生まれた子供が元気に育っています。このイカの子供は当館での3世ということになり、飼育下での3世誕生は日本で初めてのことです。今後は、シリヤケイカの4世や5世と共に世界一大きいダイオウイカをも飼育してみたいと思っています。

（祖一）

トピックス

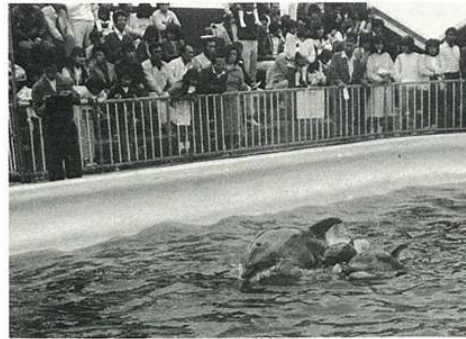
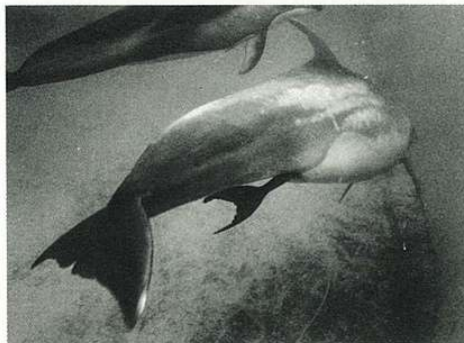
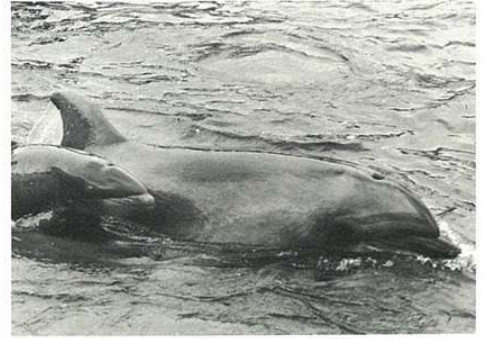
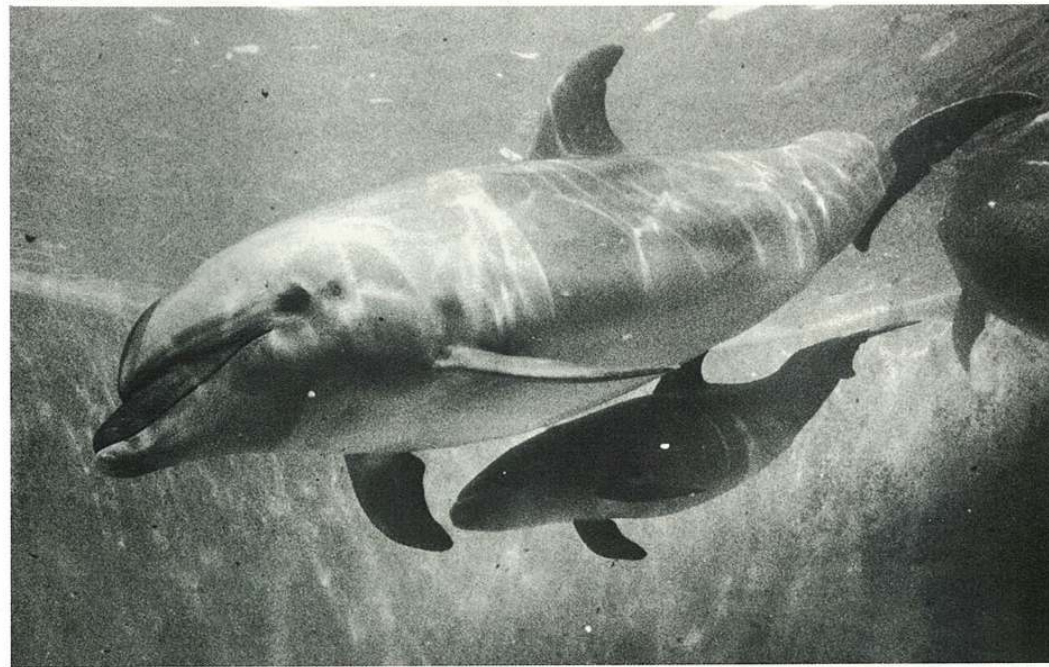
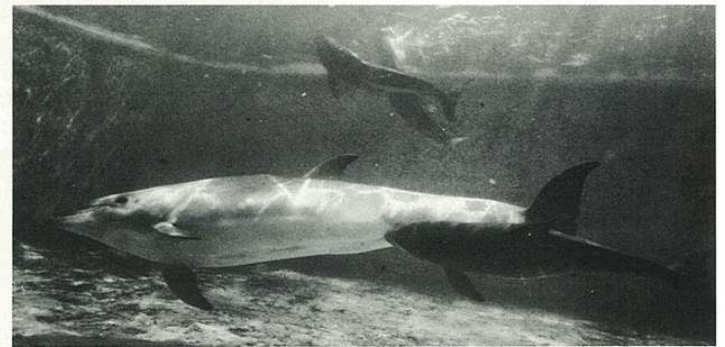
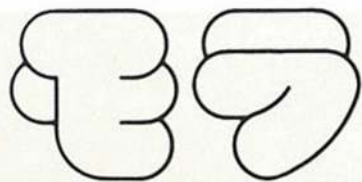
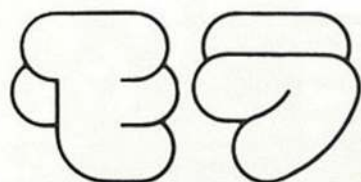
イルカの赤ちゃんが生まれました。

多数の利用者で賑わうゴールデンウィークの５月３日に、当館ではうれしいニュースが湧き起こりました。それは、バンドウイルカのスリム（14才）が赤ちゃんを産んだことです。今回のイルカの出産は当館では５回目で、スリムにとっては２度目にあたります。

この日、スリムは朝から陣痛が始まり、午後３時50分には仔イルカの尾びれが出始め、それから１時間後の４時45分に無事出産しました。このようすは、約200人のお客様も見守っていて、仔イルカが元気良く水面にとび出して来た時には、盛大な拍手が湧き起りました。

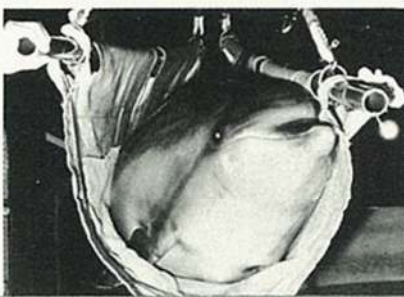
仔イルカの大きさは、体長が約１ｍ20㎝、体重が約30㎏（メス）で、大変元気が良く、夜には授乳も確認され、私達を安心させてくれました。また乳母役としてカマイルカも親仔に付き添い、まだなんとなくぎこちない仔イルカの泳ぎを助けていました。

さて、この仔イルカですが、バンドウイルカとは形や色などの点がやや異なっていて、交尾期と思われる11～12ヶ月前には、オスのオキゴンドウとの発情行動が観察されたこと、および、その以前にはオスのバンドウイルカは同一プールで飼育されていなかったことなどから、世界でも珍しいバンドウイルカとオキゴンドウとの雑種ではないかと考えられています。皆さんも、この仔イルカの成長を見守ってやって下さい。（宮下）

▲仔イルカのからだには５本から６本の横じわが見られます。これは母親の胎内でからだを曲げていた時にできたもので、出産数ヶ月後には消えてしまいます。

▼イルカの出産は、水の中で行なわれるため、仔は尾びれから生まれてきます。全身が水中に産み出されると、自分の力で水面に浮き上り、最初の呼吸をします。また、へその緒は産み出されると同時に自動的に切れてしまいます。

▲多くの人々の見守る中、仔イルカ（中央）は、母イルカと乳母イルカに付き添われて元気良く泳ぎ始めました。

▲泳ぎの未熟な仔イルカは、いつも母イルカに付き添われています。

▶授乳中の親イルカは、仔イルカが呑み易いようにやや体を横にしてゆっくりと泳ぎます。仔イルカには、乳首をくわえるための唇がないので、舌をストローのようにまるめて乳を呑みます。

イルカの輸送

4月3日、富山県魚津市でイルカのショーを行うためにバンドウイルカ2頭を輸送しました。当館を夕方5時に出発し、魚津到着は翌朝9時という16時間に及ぶ輸送でした。イルカ1頭が入る特製の箱2つをトラックに積込み、その中にタンカに乗せたイルカを納め、上からは、体表が乾いて火傷の様な状態にならないよう、シャワーをかけ続けました。そして輸送中のイルカの状態を知るために、定期的に体温、呼吸数、心博などをチェックし、異常があった場合には、筋肉注射を行うなど万全をきしました。また4月12日には、避寒のために新潟県の瀬波水族館からあずかっていたバンドウイルカ2頭の返送も行いました。この輸送も約12時間を要しましたが、長旅の末、イルカがプールで元気に泳ぐ姿を見るのは実に気分のよいものです。

（毛利）

マンボウの愛称決定

今年の2月にユーモラスで海ののん気者として知られるマンボウが2尾そろって789日という飼育世界記録を樹立しましたので、これを記念し2月21日から3月31日まで2尾のマンボウの愛称を公募いたしました。その結果、全国各地より4284通もの応募があり整理にあたった私達はうれしい悲鳴をあげました。応募の中にはマンボウをもじったもの、社名や地名、長寿にちなんだ愛称等の力作が数多くみられました。選考会は4月5日に厳正な審査のもとに行なわれ、マンボウのイメージから千葉県成田市の鈴木恵子さん（13才）の「ユーラン」と大阪府堺市の藤井徹也君（9才）の「ノンキー」が愛称と決まりました。すてきな名前のついた2尾のマンボウは6月5日には元気に飼育日数900日を迎え、私達の苦労をよそにお客様に愛きょうを振りまいています。

（津崎　順）

園内案内所と園内ガイド

春休み・夏休み・ゴールデンウィーク等お客様がたくさんご利用いただく時にテント式の仮設園内案内所を設置しサービスにつとめてまいりましたが、今年4月より園内のサービス向上を目的として常設の園内案内所と園内ガイドをもうけ、より一層のサービス向上につとめています。この結果、ショーへの案内、ショースタンド内の整理、レストランへの案内、その他園内の施設案内、又迷子の保護、園内の呼び出し、列車とバスの時刻、道路案内、ホテルや民宿等の場所、近くの観光施設案内などなどなど、大変役立っております。これからもご利用いただくお客様に「シーワールドは園内が不便だ」といわれない様お客様とのふれあいを多くし、気持ち良くお帰り頂けるため努力してゆくつもりです。

（金高）

オーストラリアの水族館建設に協力

オーストラリアの西端、インド洋に面したパース市の近くにヤンチャップ・サンシティ・マリンライフパークと呼ばれる水族館が新しく開館されようとしています。当館では、この水族館よりイルカやアシカなどの動物飼育と調教について技術援助の依頼を受け、今年の10月オープンまで、動物の捕獲から調教までの技術指導の協力をおこなうことといたしました。すでに第一陣、第二陣が現地に出向し、イルカの捕獲やオーストラリアアシカ、オーストラリアオットセイの捕獲を完了するとともに、オーストラリアの若いトレイナー達に調教や飼育を指導しています。6月3日には、さらに第三陣も出発しました。今までにも、ホンコン、インドネシアなどに技術協力をしてきましたが、これからも、世界の子供達のために積極的に協力していきたいと考えています。

（鳥羽山）